

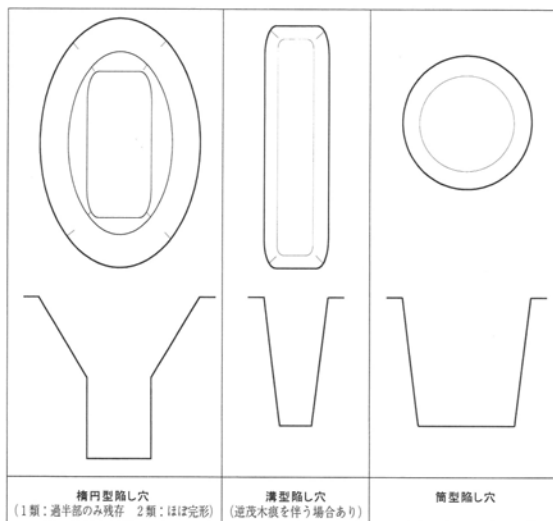
## 4 陥し穴についての一考察

三平Ⅰ遺跡では69基、三平Ⅱ遺跡では43基、計112基の陥し穴を確認するに至った。ここでは発掘調査及び整理の過程で明らかになった以下4つの観点について考察を行いたい。

### (1) 形状

本報告では、長野原町の関連遺跡の報告等を踏まえて3タイプ4類に分類した(Ⅲ・1・(4)・①陥し穴の項参照)。

- ①楕円型1類—上面・下面形状とも長方形が基準で、壁が垂直に立ち上がるタイプ。楕円型2類の上半部が欠損したものの可能性が高い。
- ②楕円型2類—上面形状は楕円形、下面形状は長方形を基準とし、壁は下半部が垂直で、上半部が緩やかに外反して立ち上がるタイプ。
- ③溝型—上面形状は細長い楕円か長方形、下面形状は細長い長方形か溝状のタイプ。底部施設(逆茂木痕)を伴うものがある。
- ④筒型—上面・下面ともほぼ円形で、壁が垂直に立ち上がるタイプ。



第162図 陥し穴模式図

三平Ⅰ遺跡・三平Ⅱ遺跡をトータルした分類の結果は、楕円型1類35基(Ⅰ:19基、Ⅱ:16基)、楕円型2類58基(Ⅰ:43基、Ⅱ:15基)、溝型16基(Ⅰ:6基、Ⅱ:10基)、筒型3基(Ⅰ:1基、Ⅱ:2基)となる。残存状況から2分類した①楕円型1類と②楕円型2類は基本的には「楕円型」と同一タイプに括り、タイプ別に割合で表すと、112基中93基(83.0%)が楕円型となり、全体の数量の8割を超える。一方、溝型は112基中16基で14.3%、筒型は112基中3基で2.7%と少ない。陥し穴の形状や規模は、イノシシ或いはシカなどの大型動物を捕獲するための罠としての機能と直接結びついているはずであり、試行錯誤の中で少しずつ改良され定形化されていったはずである。従って単純に考えれば、全体の数量の8割を超す楕円型陥し穴が、動物の体格や体型、運動性や行動性、或いは習性等を考慮した上で、最も合理的で効果的な罠だったという可能性も考えられるが、形状の差異の原因には、当然、時期差や獲物の種類の違いによる機能差なども想定でき、今後の調査の成果を待ちたい。

なお、三平Ⅱ遺跡81区31・40・41・47・56号土坑(溝型)では、陥し穴底部で逆茂木痕と考えられるピットを2~11基の範囲で確認している。溝型陥し穴には、楕円型陥し穴よりも高い頻度で、逆茂木痕が伴う事例は立馬Ⅰ遺跡(群埋文388集)・立馬Ⅱ遺跡(群埋文375集)でも報告されており、溝型に底部施設(逆茂木痕)が伴う背景には、罠としての機能的な関連も考えられるため、追記しておく。

### (2) 重複関係

三平Ⅰ遺跡では、陥し穴相互で、それぞれ19号土坑(楕円型)と20号土坑(溝型)、21号土坑(楕円型)と22号土坑(溝型)、43号土坑(楕円型)と42号土坑(溝型)の3事例、三平Ⅱ遺跡では81区35号土坑(楕円型)と81区34号土坑(溝型)の1例で重複関係が確認できる。そして、いずれの場合も楕円型陥し穴が溝型陥し穴に切られており、古いことが分かっている。

また、他種の遺構との重複では、三平Ⅰ遺跡の1

## V まとめと課題

号焼土と79号土坑（楕円型）、4号焼土と81号土坑（楕円型）、5号焼土と84号土坑（楕円型）、6号焼土と60号土坑（楕円型）の4事例で重複関係が確認できる。焼土は全て陷し穴が自然埋没後の埋没土直上に形成されている。1・4・5号焼土には9世紀第3四半期の土師器が、4・5号焼土には、同時期の須恵器が伴っている。

また、三平Ⅰ遺跡の73号土坑と84号土坑（楕円型）の重複関係では、73号土坑が84号土坑を切っており新しいことが分かっている。73号土坑には、9世紀半ばの土師器が伴っている。

本遺跡の調査では、異タイプの陷し穴（楕円型と溝型）相互の新旧関係、平安時代の焼土と楕円型陷し穴との新旧関係、また平安時代の土坑と楕円型陷し穴との新旧関係が明らかになる事例を得た。陷し穴の出土遺物については、埋没時の流れ込みの可能性が高く、出土遺物によって陷し穴の帰属時期を認定できない場合が多いため、このような遺構相互の重複関係は重要であり、そのデータの蓄積も含めて今後の課題となろう。

### （3）構築時期

既にⅢ・1・（4）・①陷し穴の項で触れたように、本遺跡の陷し穴の構築時期については、平安時代焼土との新旧関係、出土遺物の流れ込みの可能性、花畑遺跡（群埋文303集）における金属製鋤先痕の検出や炭化物の放射性炭素年代測定の結果等を総合し、「古代」と一括りにして扱った。

特筆すべきは、三平Ⅰ遺跡の1号焼土と79号土坑（楕円型）、4号焼土と81号土坑（楕円型）、5号焼土と84号土坑（楕円型）、6号焼土と60号土坑（楕円型）の4事例で重複関係が確認でき、焼土は全て陷し穴が自然埋没後の埋没土直上に形成されていることである。1・4・5号焼土には9世紀第3四半期の土師器が、4・5号焼土には同時期の須恵器が伴っていることから、4基の楕円型陷し穴の構築時期はそれ以前と限定される。しかも79・84号土坑からは、自然埋没過程のどの段階かは不明だが、流れ込みと考えられる9世紀半ばの土師器片が出土して

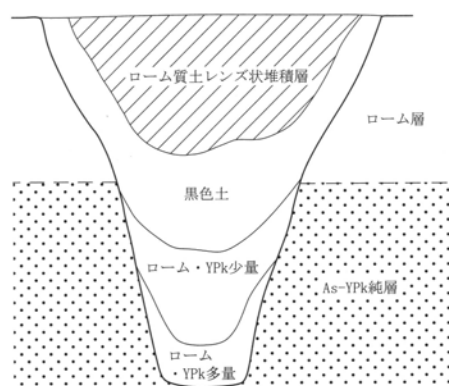
おり、この2基の楕円型陷し穴の構築時期は9世紀第3四半期以前の時間差の少ない一時期に限定される可能性が高いといえよう。

なお、本遺跡の調査では中世以降の陷し穴の存在を明らかにする事例は得られなかった。

### （4）ローム質土レンズ状堆積層

本遺跡の陷し穴の埋没状況においては、Ⅲ層を基準とする黒色土あるいは黒褐色土がレンズ状に堆積し自然埋没したことを示す事例が多いが、既にⅢ・1・（4）・①陷し穴の項で触れたように、その中には、「ローム質土レンズ状堆積層」と呼称する土層（埋没土上層に見られ、ロームブロックやローム粒、スコリアや小礫、場合によっては焼土や炭化物を混入し、下層の黒色土系の埋没土と比較すると相対的に黄色味を帯びたように見える埋没土層）が確認できる場合がある（第163図）。

この埋没土層は、三平Ⅰ遺跡では陷し穴69基中31基（楕円型62基中29基、溝型6基中2基、筒型1基中0基）、三平Ⅱ遺跡では43基中17基（楕円型31基中14基、溝型10基中2基、筒型2基中1基）で確認でき、三平Ⅰ・Ⅱ遺跡トータルでは112基中、4割を超える48基で確認できることになる。



第163図 陷し穴埋没状況図

このローム質土レンズ状堆積層が、4割を超える陷し穴の埋没土上層に、どのような要因で堆積したかは不明である。現時点において明らかなことは、この層が陷し穴の埋没土上層に堆積し、下層にはしよりの弱い黒色土が堆積していること、陷し穴は自

然埋没状況を示しており、人為的に埋め戻された形跡がないことである。

ところで、このローム質土レンズ状堆積層に相当する陥し穴の埋没土層は、本遺跡のみに認められるものではないことが分かってきた。

例えば、花畑遺跡（群埋文303集）では、土層注記及び断面写真から判断する範囲で、陥し穴53基中、6割を超える32基でこの土層の存在を確認できた。花畑遺跡の場合、陥し穴53基中45基が、本報告で分類するタイプでは楕円型である。そして、同埋没土層は、長野原一本松遺跡（群埋文287集）、立馬Ⅰ遺跡（群埋文388集）、立馬Ⅱ遺跡（群埋文375集）でも確認できる。

ここで取り上げた、ローム質土レンズ状堆積層の確認できる6遺跡（三平Ⅰ・三平Ⅱ・花畑・長野原一本松・立馬Ⅰ・立馬Ⅱ）は全て吾妻川左岸に位置している。また、本遺跡から最も離れた長野原一本松遺跡は直線距離で約5km西に位置する。吾妻川左岸東西5kmにも及ぶこの範囲に共通して存在するこの埋没土層はいつ、いかなる理由で堆積したものでしょうか。本遺跡の事例で明らかなのは、構築時期を「古代」と一括りにした陥し穴の自然埋没土層に確認できること、さらに詳細に見れば、79・84号土坑のように9世紀第3四半期以前の時間差の少ない一時期に構築されたと考えられる楕円型陥し穴埋没土層に確認できることである。仮に、このローム質土レンズ状堆積層が、古代の特定時期に、吾妻川流域に発生した火災・地震・地滑り等の自然災害に起因するものであって、その時期や年代が確定できるとすれば、この地域においては、考古学的に重要な鍵層となるとともに、該期の地域史、災害史を物語る上でも重要となろう。

（篠原正洋）

#### 参考文献

- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡（Ⅰ）』第287集  
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『ハッ場ダム発掘調査集成（Ⅰ）』第303集  
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡

（Ⅱ）』第356集

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅱ遺跡』第375集

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬Ⅰ遺跡』第388集

## 5 三平Ⅱ遺跡の建物群について

飯森 康広

### （Ⅰ）はじめに

建物群を検討する前提として、掘立柱建物跡の認定の問題がある。本遺跡で筆者は幸い調査段階から検討に加わる機会を与えられ、図上復元を並行作業として行いながら、最終的な建物認定をすることができた。この結果、柱穴有無の確認が想定される柱筋の延長線上は、例外なく確認精査を行い、無いという結論を得ている。したがって、次項でみるとおり、一方の壁面が伸びる建物があることについても、少なくとも見落としではないことを付け加えておきたい。

### （Ⅱ）建物群の概要

三平Ⅱ遺跡は、西側小河川と東側の谷状地形に挟まれた馬背状の台地であり、建物群はその南端に位置する南向きの緩斜面に集中している。建物は全て掘立柱建物で、7棟が認定された。柱穴と思われるピットの遺跡全体数は61基であり、建物として集約されなかったピット数は概して少ない。したがって、遺構として認定できた掘立柱建物跡7棟を検討することで、遺構群のおよその検討は可能と考える。

90区1号掘立柱建物（以下90-1建と略す）は最大で、南東部に位置して重複がない。同規模のものがほかに建物群内でみられないことから、中心的な建物として比較的長く使用されたものと想像される。残る6棟の建物跡では90-2建・90-3建が重複、また81-1建、90-4建、90-5建の3棟も重複しており、最低でも3つの時期にわたる遺構群と考えられる。したがって、90-1建を含めて一時期に3棟程度で構成される建物群であった可能性が高い。

本遺構群の年代を直接示す遺物の出土はないが、北側の谷地と周辺で中世の在土器が比較的多く出